DV 被害女性とその子どもへの支援活動

１、背景・目的

夫や恋人からの暴力に悩んでいる女性は多い。また、母親が DV 被害者である家族環境で育つ子どもへの影響も多大である。しかし、DV 被害女性とその子どもへの支援活動は十分にいきわたっていないのが現状である。社会の動きの中で見落とされがちな DV 被害女性とその子どもへの支援活動の現状と課題について、支援団体の活動にかかわりながら基礎的な調査研究を行った。

２、年間スケジュール

平成 27 年 8 月～　ウィメンズネット函館の活動に参加（通年）

8 月～平成 28 年 2 月　文献調査

＊コンカレントプログラムマニュアル

－日本における DV 被害母子同時並行プログラム実践報告ー

＊改訂版 コンカレントプログラムマニュアル

－DV 被害にあった母親と子どもたちの同時並行心理教育プログラムー

＊DV 被害当事者生活実態アンケート調査報告書

＊北海道社会とジェンダー

－労働・教育・福祉・DV・セクハラの現実を問うー

コンカレントプログラムに必要な物品を揃える

2 月　札幌での情報交換会

3 月　コンカレントプログラムメンバー顔合わせ（コンカレントプログラム実施団体、こども・DV 被害者支援施設）

4 月～7 月　コンカレントプログラム実施

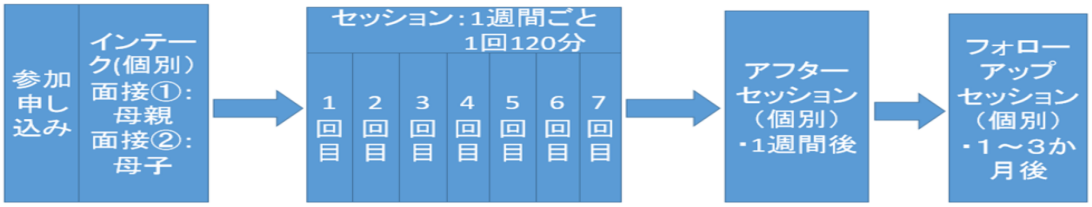
8 月　アフターセッション

３、プロセスと成果

DVシェルター入居中の子どもとかかわるとともにシェルター入居経験のある子どもを支援する“子どもサポートふわっとの活動に１年間を通して参加した。また、当初は、DV に関する文献調査を行った。文献調査をしてみて、経済的援助やシェルター入居の隔離のような支援方法のみでは、本人たちの自立援助には不十分であることが見えてきた。そこで、自分たちが変わることのできるようエンパワメントを促すプログラムが必要と考え、コンカレントプログラムが最適であるということに至った。

コンカレントプログラムとは、DV 被害を受けた母親と子供を対象とした心理教育的援助である。母親と子どもは、それぞれのグループを構成し、「暴力・責任・感情・安全」等の

言葉をキーワードにして母親グループは「エクササイズ」、子どもグループは「ワーク」と呼ぶ活動を展開する。今回学生が母親グループのスタッフとして参加すると、母親たちが自分の気持ちをありのままに話せない可能性があるということで、私たちは子どもグループにのみスタッフとして参加した。コンカレントプログラムの流れは次の通りである。



家族の中で体験した暴力や暴力の責任と理解、怒りの理解と表現などについてセッションを行った。最初の内は暴力の話をすることに抵抗がある様子だったが、グループの回数を重ねるごとに信頼関係が構築され、子どもたちが感情の表出をしてくれるようになった。このグループが子どもたちの安心の場になっていたと思う。また、プログラムを継続していくことで、子どもたちにとって学生が信頼出来る存在になれたことが成果である。

４、総括と反省、今後の課題

プログラム当初、子どもたちは家庭環境によって表現や感情を抑制する傾向が見られた。また、個性を持っていながらも、周囲との関係作りが得意でない子どももいるため、私たちが子どもグループのメンバーとして参加し、子どもと同じ目線になり、「子ども対大人」の構造を作らないように意識した。今後の課題としては、集団でプログラムを実施することは効果を支える重要な要素であったが参加者のタイミングによりそれが困難なことが挙げられる。プログラムの効果をできるだけ落とさず個別のニーズに合わせた実施ができるか検討が必要である。全体としては、地域プロジェクト前半での文献調査等により、コンカレントプログラムへの取り組み開始が遅れてしまった。情報交換会でのお話や自分たちが実際に始めてみて、もっと念入りに準備をしたり、ゆとりのあるプログラムの期間を設定するべきであった。　ウィメンズネット函館の活動に積極的に参加することで、子ども達と同じ時間を過ごすことができたので、コンカレントプログラムに生かすことができたことが良かった点である。

５、地域からの評価

ウィメンズネット函館代表　古川満寿子　　母親グループ担当

シェルター活動を始めて 18 年になります。ＤＶ被害を受けた母に同伴されて 来室する子どもＤＶ被害者当人です。シェルターに入ったときは暫く学校を 休みます。その子も達を支える活動のボランティアを教育大の学生さんにお 願いしました。一緒に遊んだり学習を見てくれるその活動は安心できる大人と 出会い、子ども達が子どもらしさを取り戻し、自信をもって生きていく支えに なっています。今回のプログラムに参加したことも母と子

の力になっていくこ とを期待しています。

ウィメンズネット函館　　加茂章子　子どもグループ担当

　DV 環境で育った子どもたちは心に大きな傷をかかえることになります。シェルターに入居し、退去した子どもたちの心のケアをする中で子どもたちが回復するためには母親も一緒に回復しなければならないと強く感じていました。そんな時、プログラムを開催出来ることになり、大きな期待を持ちました。初めての体験で課題はたくさんありましたが、まず、最後のプログラムまでやり遂げることができ、私自身もとても勉強になりました。今回学んだことをこれからの“子どもサポートふわっと”を運営する中で役立てたいと思います。[f1]

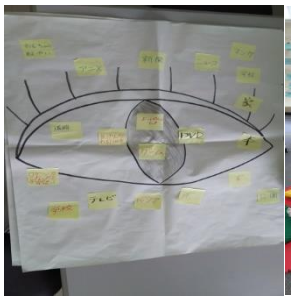
函館短期大学非常勤講師（養護教諭）　川村幾代[f2][f3]　子どもグループ担当

　DV の家庭環境に育つこどもたちの心理的ダメージは深刻である。今回の地域プロジェクトはそんな自分自身に自信を持てない子どもたち４人を目の前にして７回のプログラムを展開していくものであった。当初はいろいろな反応を見せる子どもたちに戸惑ったこともあったと思う。しかし、子どもたちと接する時、同じ目線になって一緒に楽しむ時間を持てたこと、常に子どもたちのとる行動の意味を理解しようと努めていたところがよかったと思う。子どもたちが回を重ねるごとに信頼を寄せ距離を縮めてきて変化してきたこと、６回目のプログラムでは信頼出来る大人に、学生４人を挙げてくれたということは、丁寧に関わってきた成果と言えると思う。自分自身の貴重な休日を使ってのボランティア活動、本当によく頑張りましたね。

函館短期大学非常勤講師　小岩真智子（臨床心理士）　母親グループ担当

　「コンカレントプログラム」の導入を目指してから約３年を経て，函館において第１回目を実現することができた。ウィメンズ職員の熱意と藤井先生の判断力，学生諸氏４名の奉仕精神の賜である。今回，参加者母子の心を支える等の成果を上げたとは言い難いが，実施者 10 名は，プログラムの理念，内容，方法等を体得できた。この取組が，有効な「函館バージョン確立」の基盤になるとともに，次世代の担い手４名をも育んだと確信する。

６、メンバー一覧

担当教員　藤井廣美

４２３３　橘友梨香　４２５３　横山陽子４２２５　山田梨奈４２４１　相馬里衣